

Support for **Woman** Doctors ～私からあなたへ～

関 昇子 先生【千葉県 22 期】

茨城県立中央病院総合診療科

お子さんは 9 歳長女と 5 歳次女の 2 人

「決戦の金曜日」



毎週金曜日は我が家にとっては決戦の日です。私は茨城県のほぼ中心に位置する茨城県立中央病院の総合診療科に、当直なし入院あり救急対応ありのフルタイムで勤務しています。金曜午後は内科救急当番で、開業医からの駆け込み入院依頼や週末前で不安になってしまった直来患者の診察をこなし、研修医と一緒に救急外来を駆け回っています。担当入院患者の具合が悪くなるものなら、病棟にダッシュすることもしばしばです。夕方 5 時 15 分で当直帯に切り替わりますが、食欲不振の高齢者など専門科には依頼できない患者は自科で入院させたりするので、なかなか時間通りには終わりません。その上時間のかかるリハビリカンファランスがよりによって金曜日に設定されており、夜 7 時の小学校の学童のお迎えに遅れないようにそわそわしながら出席します。6 時 45 分になると、研修医や看護師に患者の相談をされても「今は無理です～」と走り去り、急いで着替えて車で 7 分の学童に滑り込みます。まだ仕事は終わっていないので、娘の夕食をコンビニで買って、再び病院に戻ると救急外来の休憩室に娘を置いて、仕事に戻ります。小学生になってから 3 年間この状態で金曜日を過ごしており、長女はすっかり救急スタッフに顔が売れており、「ただいま～」と挨拶しています。歴代師長にも可愛がってもらい、宿題の丸つけをしてもらったり、学会のお土産をもらったりしています。その間次女は病院附属の保育園で夕食まで食べさせてもらって、迎えを待っています。夜 9 時のタイムリミットまでに何とか仕事を終わらせて保育園に次女を迎えに行き、帰りがけに救急に寄って長女を連れてから帰宅します。（同じ病院の同じ科に勤務している夫は、管理職になってしまい会議や出張で不在のことが多く、全てを一人でこなさないといけない日は本当にスリリングです。）

しかし、何といっても最大の決戦日だったのは、5 年前の 3 月 11 日金曜日です。人生で経験したことのないような

激しい地震にびっくりし、出産予定日より 3 日早く陣痛となり、信号機がすべて停止して大渋滞になっている状況でかかりつけの産科に行けず、勤務先の救急外来に駆け込みました。当時産科は医師不足で 9 年間分娩を停止していたので分娩台も何もなく、停電して暖房もない寒い救急外来のストレッチャーの上で次女を出産しました。手術室は壊滅状態でしたので、もし何かあったら子供も自分も死ぬかもしれない、と悲壮な決意で出産に臨んだことを思い出します。（昔私が当直中に、腹痛でやってきた若い女性が子宮口全開大でびっくりした経験がありますが、まさか自分が救急外来で出産することになるとは…。人生何があるかわかりません。）節目となる今年の 5 歳の誕生日も、偶然金曜日でした。やっぱり救急外来が長引いて、夫にお迎えと予約していたケーキの受け取りを頼みましたが、ケーキ屋の閉店時間を過ぎてしまったというハプニングがありました。号泣する次女に気づいてくれたのかお店を開けてもらい、無事にケーキは手に入り、お誕生会もできました。

毎日バタバタして、平日は夕食を作ってあげることも家族そろって食事を食べることもほとんどなく、こんな生活でいいのだろうか？と現在進行形で悩みながらの仕事と子育てです。一度、夫婦間連絡ミスで子供たちは相手が連れて帰ったと思い込んで仕事をし、夜の 11 時まで病院で子供たちを待たせてしまったことがあります。眠い目をこすりながら辛抱強く待っていた子供たちにさすがに申し訳なく、「お父さんとお母さんが悪かったよ、本当にごめんね。」と謝ると、長女は「悪くないよ。一生懸命仕事してくれているのわかってるから、大丈夫だよ。」と、なんともいじらしい返事で、思わず泣きそうになりました。

何が正解かなんて分からないけれど、「大好き」と言ってくれる子供たちに力をもらって、これからも出来ることを積み重ねていこうと思います。

後輩医師・学生へ一言メッセージ

『期待はしないで、感謝しましょう』